

令和3年8月28日

南の風 Olympic 日本女子代表の戦術考察II

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

『緻密に』を私なりに考えてみます。

まず3Pシュートです。決勝のアメリカ戦では26% (8/31) に封じられました。打たせてもらえたかった、というのが正解だと思います。

具体的にいうと、町田選手からのキックアウトパスを読まれたこと、宮澤選手、林選手が徹底的にマークされ楽にボールを持たせてもらえたかったことです。決勝では、3Pシュートの確率が極めて高い2人が、完璧に抑えられ3Pの得点は0でした。

特集号に書きましたが、アメリカは、町田選手の3Pシュート確率が高くないことから、町田選手へのマークはややルーズにし、パスを警戒したのだと思いました。

通常ですとガードやフォワードが、トップやウイングからのドライブでペイントを突き、ヘルプが来ればコーナーは非常に守りにくくなるので、キックアウトして3Pを打ちます。しかし、決勝のアメリカは、先読みして素早いローテーションで封じました。エキストラパスについても、とにかくアメリカは林選手、宮澤選手には打たせない作戦だったと思います。

では日本の生命線である、3Pシュートをどう打つかです。

例を挙げます。3on3 (町田、宮澤、林の3選手) で考えます。スクリーンを有効に使うことです。町田選手がドリブルでフロントコートにドリブルエントリーしたとします。宮澤選手がドラッグスクリーン (トレーラーがディフェンスが整わぬうちにオンボールスクリーンに行くこと) に行きます。町田選手はドライブで攻めます。宮澤選手はダイブすると見せかけてポップアウトします。そこでさらに、宮澤選手に対応しそうなディフェンスに、林選手が時間差でスクリーン (スタッガードスクリーン) を掛けます。そうして宮澤選手、林選手のどちらか空いた選手が3Pシュートを打つ作戦です。

スクリーンプレーで大事なことは、掛ける角度 (角度)、タイミング、アフターの動き、ファウルに気をつけることですから、日本はここを、いっそう『緻密に』やっていきたいと思います。

偉そうなことを書いてしまいましたが、一つの例です。

アメリカを倒すためには、日本代表の12人が3Pシュートの精度をより高めることです。今回のオリンピックでは、全員が積極的に3Pを打ちましたが、本数と精度には差がありました。ここをさらに追求して確率を上げてほしいと思います。

ディフェンスについてです。1on1のディフェンスの質を一段と上げていきたいです。単純にヘルプを頼ってしまうとミスマッチが起こり、サイズが影響してしまうからです。今回のオリンピックでも、ディフェンスは体を張ってがんばっていたのですが、もう一段「読みと脚力」のグレードを上げたいです。

リバウンドについては、現在の戦術の精度と強度 (コンタクトに負けない) を上げることが重要です。

町田選手が「アメリカは確かに強かったです、勝てない相手ではありません」ときっぱり言い切っていました。たいへん頼もしいコメントです。

日本中、いや世界中に感動と衝撃を与えた日本女子代表アカツキファイブは、今後どんな活躍を見てくれるのでしょうか！！ 世界選手権、パリオリンピックがたいへん楽しみです！！